

思考・感情を表現する力を育てるコミュニケーション教育の提案： メタ認知の観点から

A proposal for communication education to improve abilities to expressing our thoughts and feelings: In terms of metacognition.

三宮真智子

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748

鳴門教育大学学校教育実践センター

Machiko SANNOMIYA

Research Center for School Education, Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi 772-8502, Japan

抄録：国際化、情報化などの影響を受け、文脈依存性が高く言語的明示性の低い従来の日本固有のコミュニケーション・スタイルは、現在では通用しにくくなった。現在の日本において解決すべきコミュニケーションの問題は、自分の考えや気持ちをうまく伝えられないことである。そのために、①優れた意見であっても相手に伝わりにくく受け入れられなかったり、共同思考に貢献できなかったりする、②気持ちが十分に伝わらず、信頼感のある共感的な関係が築きにくい、といった結果を招いている。考えや気持ちを効果的に伝えるためには、コミュニケーションに関わる人間の認知や感情を対象化してとらえること、すなわちコミュニケーションに対するメタ認知が重要である。本稿では、メタ認知に基礎を置き、考え・気持ちを伝える情報表現力を育てるコミュニケーション教育の必要性とその理論的背景を述べ、コミュニケーション教育で扱うべき内容について提案した。

キーワード：コミュニケーション、メタ認知、認知、感情、教育、総合学習

Abstract : Traditional Japanese communication style, which is highly context-dependent and lacking of clear linguistic expression, is now less acceptable as Japan has been internationalized and informationalized. One of the communication problems to be solved in current Japan is difficulty in expressing our thoughts and feelings. It causes the following demerits: 1) Our opinions are not easily understood and accepted even if they are excellent, and we cannot contribute to collaborative thinking with others. 2) Our feelings are not well understood and we cannot build a relationship of mutual trust and empathy. To catch cognition and feelings of people who are communicating objectively, that is metacognition of the communication, is important in order to express our thoughts and feelings effectively. This article argues the necessity of communication education for developing the ability of expressing thoughts and feelings, introduces its theoretical backgrounds and presents the contents to be treated, based on the concept of metacognition.

Keywords : communication, information, metacognition, cognition, feeling, education, integrated studies

1. はじめに

日本は現在、コミュニケーションに関する深刻な問題を抱えている。それは、自分の考えや気持ちを他者にうまく伝えられないことである。

これまでの、文脈依存性が高く言語的明示性の低い日本固有のコミュニケーション・スタイルは、現在では通

用しにくくなった。従来の日本的なスタイルは、ものの見方・考え方が似通ったメンバーの親密な人間関係を前提としたものであったが、この前提が崩れ始めたためである。その背景には、国際化や情報化の影響がある。また、世代交代による価値観の変化も関係している。

コミュニケーションにおける意図的・非意図的なあいまいさや「察し」が許容されなくなると、自分の考えや

気持ちを言葉で明確に伝えることが要求される。しかし、日本人の多くはこの要求に十分応えることが困難である。この問題が、次のような状況を引き起こしている。

①優れた意見であっても効果的に伝えられず、他者に正しく評価されない。

②自分の気持ちを適切な表現で伝えられず、他者との間に誤解を生み、人間関係を不満の多いものにする。

これは、個人レベルのコミュニケーションから国際コミュニケーションまで、さまざまなレベルのコミュニケーションに当てはまる。

このままでは、次のような結果を生む。

①個人や集団、国家の判断・主張が不当に低く評価されて受け入れられなかったり、また共同思考による問題解決に貢献できなかったりする。

②対人関係から国際関係に至るまで、信頼感のある共感的な関係を築くことができにくい。

こうした思考や感情といった情報の表現力の問題を解決するためには、言語能力や情報技術のみでは十分ではなく、コミュニケーションに関わる人間の認知や感情を対象化してとらえるメタ認知が必要である。本稿ではこうした考えに立ち、メタ認知に基づいて情報表現力を育てるコミュニケーション教育の必要性とその理論的背景を述べ、コミュニケーション教育で扱うべき内容について提案する。

2. 日本社会が抱えるコミュニケーションの問題とコミュニケーション教育の必要性

2.1. 日本におけるコミュニケーション文化の変容

文脈情報にあまり頼らず細部まで明確に言葉で表現する欧米の言語文化（「低コンテキスト文化」）とは異なり、日本の場合は、その場の状況や人間関係などの文脈情報への依存度が高く、言語表現そのものの明示性が低い「高コンテキスト文化」（Hall, 1966）とされている。欧米諸国は一般に複数民族で構成され、生活経験、ものの見方や考えなどが異なる人々の間で意思疎通を図ろうとするためには、おのずと全てを言語化しなければならない。これに対し、日本はもともと単一民族からなる村社会であり、生活経験、ものの見方や考えなどがよく似ているという歴史的背景があった。村社会のメンバーは家族のような親密な関係で結ばれており、それゆえ、家族どうしのようなあいまいで省略の多い話し方で事足りていたのである。また、集団のメンバーが同じ意見でまとまることに価値が置かれていたため、個人はまず集団の規範に従い、個を前面に押し出すことは避けるべきと考えられていた。人前での意見の対立はよくないものとされ、意見調整はあくまで水面下で、しかも、たとえば飲食をともにしながら「あうん」の呼吸で円満に行われること

が望ましいとされていた。そして、目下の者は目上の人間の考えを察してこれに合わせる事が当然と見なされる。かくして、欧米とはまったく異なる日本独自のコミュニケーションのスタイルが形成されることとなった。欧米人の目には、表立って議論することもなく、知らぬ間になんとか合意形成が行われる不思議な日本的コミュニケーションと映っていたようである。たとえば、国際的なビジネスコミュニケーションの場面においては、明確にものを言わず、暗にほめめかすような日本のビジネスマンとのやりとり、欧米のビジネスマンは戸惑いを隠せないようであった。このような「日本的」と呼ばれるコミュニケーションが十分に機能していた時代は、すでに終わりつつある。その背景には、相互に関係する次の3つの事情がある。

1つは、国際化により、コミュニケーションのあり方が欧米の基準で評価されるようになったことである。国際コミュニケーションのスタンダードは、あいまいさを嫌い、個人を前面に押し出す欧米型である。察しを期待した暗黙のコミュニケーションは通用しにくくなった。従来の日本型コミュニケーション・スタイルを変えなければ、国際社会で大きな誤解を受け、信頼を失い、きわめて不利な立場に立たされかねない。これは単に国際語としての英語のスキルを問う問題ではなく、ものの見方・考え方や対人態度とも関連する、コミュニケーションのより本質的な問題である。

2つ目は、情報化である。情報コミュニケーション技術（ICT）の進展により、対面コミュニケーションの多くの部分が電子メール等の電子コミュニケーションへと移行した。これに伴い、コミュニケーションのあり方が変化した。たとえば電子会議は、書き言葉ベースであるため、あいまいな発言はしにくくなり、非対面ゆえ相手の顔色をうかがうことも不可能である。また、非同期コミュニケーションであるため、あいづちによる発話促進・発想促進（三宮, 2004a）も困難である。さらに、話し手が言葉に詰まると聞き手が助け船を出して後の部分を続けるという、日本固有の「共話」（水谷, 1988）も不可能なため、自分で発言を完結させなければならない。また、対面討論と電子討論の比較実験からは、対面討論では直前話者の発言につなげる形で自分の意見を述べるスタイルが多いが、電子討論では、そうしたスタイルが減少することが明らかになっている（Sannomiya & Kawaguchi, 1999）。対面と電子メールのいずれを好むかは、パーソナリティによって異なる（Sannomiya & Kawaguchi, 2000）。対人関係に積極性の低い学生は高い学生に比べ、対面コミュニケーションにおいて問題を感じやすい（藤原・三宮, 2003）。なお、ネットミーティングなどを用いて「疑似対面コミュニケーション」を実現することは可能であるが、その場合にも完全な同期は

実現できず、また互いの視野が限定的であることから場の雰囲気を読みにくく、通常の対面コミュニケーションとは質的に異なるものと考えられる。

3つ目は、日本人の間で生じつつある価値観の変容である。現在の日本の若年層の多くは、集団に自己を合わせたり、目上の人間に従い自分を押し下げることに価値を置かない。むしろ、自分の考え、自分の感情を大切にすること。その結果、現在では、伝統的な日本型コミュニケーションは次第に通用しなくなった。しかし、だからと言って最近の日本人が、言葉による自己表現や自己主張において上達したわけでもない。そのため、話し合いで折り合いをつけることが難しくなったり、説明もなく唐突な行動に出たり、極端な場合には暴力に訴えたりすることも起こる。また、逆に、他者との直接的な関わりを避け、なるべく非対面のコミュニケーション手段に頼ろうとすることもある。こうした現象は、社会問題にもなっている。「従順でおとなしい」と見られていた子どもが実は不満を内心にためこんでおり、これが爆発して突然凶暴な行動を起こし、傷害事件や殺人事件にまで発展することもある。また、一方では、不登校や引きこもりの状態で、他者とのコミュニケーションはほとんど電子メールでのみ行うといったケースもある。

2.2. 現在の日本人が抱えているコミュニケーションの問題

それでは、現在の日本人が抱えるコミュニケーションの問題として、具体的にはどのようなものがあるのか。これについて、鳴門教育大学3年生76名（男性10名、女性66名）を対象にして、2001年に自由記述の回答を求めた結果（重複回答）を紹介する。類似の回答をカテゴリー化し、頻度の高かったカテゴリーを以下に挙げる。

- 1) 自分の意見を述べたり説明したりすることがうまくできない（自分の言いたいことをうまく言葉にできない、話がまとまらない、話がそれる、異なる意見の人に自分の意見を言えない、相手の意見に合わせてしまう、など）
- 2) 自分の気持ちを伝えることがうまくできない（自分を出すことができない、相手の顔をうかがう、当たり障りのない話しかできない、自分の気持ちを押しつける、など）
- 3) （特に初対面やあまり親しくない相手との）対面コミュニケーションが苦手である（身構える、目を見て話せない、うつむきがちに話す、小さい声で話す、メールの方が楽である、メールなら言いにくいことも言える、など）

回答者が、将来教師になろうとする者の多い、教員養成大学の学生であることを念頭に置く必要がある。すなわち、比較的他者とのコミュニケーションを好む学生た

ちであっても、このようなコミュニケーションの問題を感じていると言えよう。

また、小学生など子どもの場合にも、意見をうまく伝えられない、本音をうまく伝えられない、といった問題で悩んでいるケースが多い（三宮、2004b）。新聞にも、これらを裏付けるかのような記事が見受けられる。

自分の考えや気持ちを相手にどう伝えればよいのかわからないという問題は、言語表現力の乏しさだけでなく、自分の発言を相手がどのように受け取るのかが予測できない、相手の反応が読みとれない、といった問題にも起因する。すなわち、自分とは異なる考え方・感じ方をする他者が、自分の発言をどう理解しどう感じるかを予測したり読みとったりする力が乏しいことも大きな原因である。そのために、伝え方がわからなくなったり、伝えようとする意欲が低下したりするのである。そこで、異質な背景・価値観を持つ他者のものの見方を理解し、相手と自分のコミュニケーションを対象化してとらえること、すなわちメタ認知が必要となる。

2.3. 体系化されたコミュニケーション教育の必要性

それでは、学校教育において、コミュニケーションのための知識・スキルを育てる取り組みはどのようになされているのか。たとえば、高等学校のカリキュラムにおいては、国語、英語、情報の各教科が特にコミュニケーションと関係が深いと考えられる。これらの教科についての学習指導要領（文部科学省、1999）から、特にコミュニケーションに関連する部分を抜き出してみたものが、表1である。

表1 国語、英語、情報の学習指導要領に含まれるコミュニケーション関連部分

①国語1

<目標>

国語で適切に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし言語感覚を磨き、進んで表現することによって社会生活を充実させる態度を育てる。

<内容>

次の事項について指導する。

- ア 自分の考えをもって論理的に意見を述べたり、相手の考えを尊重して話し合ったりすること。
- イ 情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること。
- ウ 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して話したり書いたりすること。
- エ 様々な表現についてその効果を吟味し、自分の表現や推敲に役立てること。

オ 国語の表現の特色、語句や語彙の成り立ち及び言語の役割について理解を深めること。

②英語

<目標>

日常生活の身近な話題について、英語を聞いたり話したり読んだり書いたりして、情報や考えなどを理解し、伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

<内容>

生徒が情報や考えなどの受け手や送り手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。

ア 英語を聞いてその内容を理解するとともに、場面や目的に応じて適切に反応する。

イ 関心のあることについて相手に質問したり、相手の質問に答えたりする。

ウ 情報や考えなどを、場面や目的に応じて適切に伝える。

エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどをまとめ発表する、場面や目的に応じて概要や要点を整理して読み手に理解されるように書く。また、発表されたものを理解する。

③情報

<目標>

情報のデジタル化や情報通信ネットワークの特性を理解させ、表現やコミュニケーションにおいてコンピュータなどを効果的に活用する能力を養う。

<内容>

- ・情報機器を活用して多様な形態の情報を統合することにより、伝えたい内容を分かりやすく表現する方法を習得させる。
- ・電子メールや電子会議などの情報通信ネットワーク上のソフトウェアについて、コミュニケーションの目的に応じた効果的な活用方法を習得させる。

指導要領においても、現実場面での他者とのコミュニケーションを重視し始めていることがうかがえる。3つの教科に分散したこれらの内容を関連づけ、さらにまた、コミュニケーションに関する心の働きを理解させるような、体系化されたコミュニケーション教育を目指す必要があると考えられる。たとえば、同じ内容を伝える際にも、どのような表現が相手にわかりやすいのか（また、わかりにくいのか）、どのような表現がよい感じを与えるのか（また、いやな感じを与えるのか）、そしてそれはなぜなのかを理解し、相手と目的に応じて望ましい表現が使用できるようにすることが重要と考えられる。そのためには、メタ認知が不可欠である。

3. コミュニケーション教育の基礎となる理論的背景

3.1. コミュニケーションの定義と分類

ここで、コミュニケーションの概念を整理しておく必要がある。そもそもコミュニケーション(communication)という語は、ラテン語の *communio* (神との交わり) に由来し、コミュニケーションに対する意識は、すでに2000年以上前から存在するという(久米, 1993)。学際的な研究の対象となるコミュニケーションの定義は多岐に渡り、126種類にもものぼるとされている(Dance & Larson, 1976)。コミュニケーションという語は日常用語でもあるために、概念としては曖昧になりがちである。また、人間と動物とのコミュニケーション、動物どうしのコミュニケーション、人間と機械とのコミュニケーションなど、コミュニケーションの範囲は広い。本稿では、コンピュータを介したものも含めて人間どうしのコミュニケーションを対象とし、コミュニケーションを言語および非言語情報の送受信ととらえる。

コミュニケーションをどのように分類するかについても、複数の観点がある。岡部(1987)はコミュニケーションを行うシステムのレベルに着目し、以下の分類を行っている：個人内コミュニケーション／対人コミュニケーション／集団内コミュニケーション／集団間コミュニケーション／組織内コミュニケーション／組織間コミュニケーション／国内コミュニケーション／国際コミュニケーション／文化内コミュニケーション／異文化間コミュニケーション

また、他にも以下の観点からの分類が可能である。

- ・双方向性：一方向コミュニケーション／双方向コミュニケーション
- ・情報形態：言語的コミュニケーション／非言語的コミュニケーション(パラ言語を含む)
- ・メディア：対面コミュニケーション／非対面(メディアを介した)コミュニケーション
- ・目的：描写、伝達、説明、説得、交渉、欺瞞、娯楽、など

さらに、関係(夫婦、親子、きょうだい、教師と生徒、など)、親疎(親しい間柄か否か)、社会的地位の高低など、さまざまな分類観点が存在する。

また、コミュニケーションを論じる際にほぼ必ず用いられる情報(information)という概念も、きわめて多義的であり、定義づけが困難とされている。広義には、遺伝情報や木の年輪、地層など、さまざまなものを情報ととらえることができる。他方、狭義には、未整理な知識という意味合いで用いられることもある。これに対し、認知心理学では、人間が意識的・無意識的にとらえる対象はすべて情報と見なす。本稿では、考えや気持ちも含めて、人間と人間との間で言語的、非言語的に伝達され

うる情報に焦点をあてて論じる。

3.2. コミュニケーションに対するメタ認知

最近よく用いられるようになったメタ認知という語は、「認知に対する認知」「認知を対象化して認知すること」を意味する(三宮, 1996; 1997)。他者との関わりを中心とするコミュニケーションという認知活動においては、とりわけメタ認知を働かせることが必要である。他者に自分の考えや気持ちを伝え、理解してもらうためには、自分の中での考えや気持ちと、他者に向かって表出する表現のギャップを埋め、また、自分の表現と相手の理解のギャップを埋める必要がある。コミュニケーションにおいて、こうしたギャップはつきものである。このギャップを埋めるためには、メタ認知が欠かせない。コミュニケーションに対するメタ認知には、図1のように、知識成分であるメタ認知的知識と活動成分であるメタ認知的モニタリングおよびメタ認知的コントロールが含まれる。メタ認知的活動は、通常の認知活動に比べて、より高次の知的活動である。メタ認知的活動が適切に行われなければ、コミュニケーション経験を積み重ねても上達しない。また、メタ認知的知識が誤っていれば、コミュニケーションを改善しようとする努力も的はずれなものになりかねない。したがって、コミュニケーション能力を高めるためには、メタ認知が重要な働きをする。コミュニケーションに対するメタ認知を支えるものは、コミュニケーション現象に対して「なぜそうなるのか?」「どうすれば

よいのか?」と問う姿勢である。

3.3. 知能理論におけるコミュニケーション能力の位置づけ

人間の知的能力すなわち知能(intelligence)の研究において、コミュニケーション能力はどのように扱われてきたのかをここで見ておきたい。コミュニケーション能力の中核をなす言語能力は、従来から、知能の重要な構成要素(因子)と見なされてきた。伝統的な知能理論の1つであるThurstone(1938)の多因子説(theory of multiple factors of intelligence)においては、一般因子と並ぶ7つの特殊因子の中に、言語能力を、言語因子(語の意味や文章理解の能力)および言語流暢性因子(同義語を挙げるなどの、語発想の流暢さの能力)として位置づけている。

これに対する新しい流れとして、Sternberg(1996)による知能の三部理論(triarchic theory of intelligence)を挙げることができる。この理論は、分析的知能、創造的知能に加え、実践的知能(practical intelligence)を知能の構成要素とした点に特徴がある。実践的知能とは、現実社会において他者と良好な関係を保ちながら問題を解決していく力と見なすことができる。そのためには、コミュニケーション能力が不可欠である。従来の知能理論で扱われてきた言語能力だけでは不十分であり、状況や他者との関係などを的確に把握し、言語的・非言語的な働きかけを効果的に行うことのできる力、すなわちコミュニ

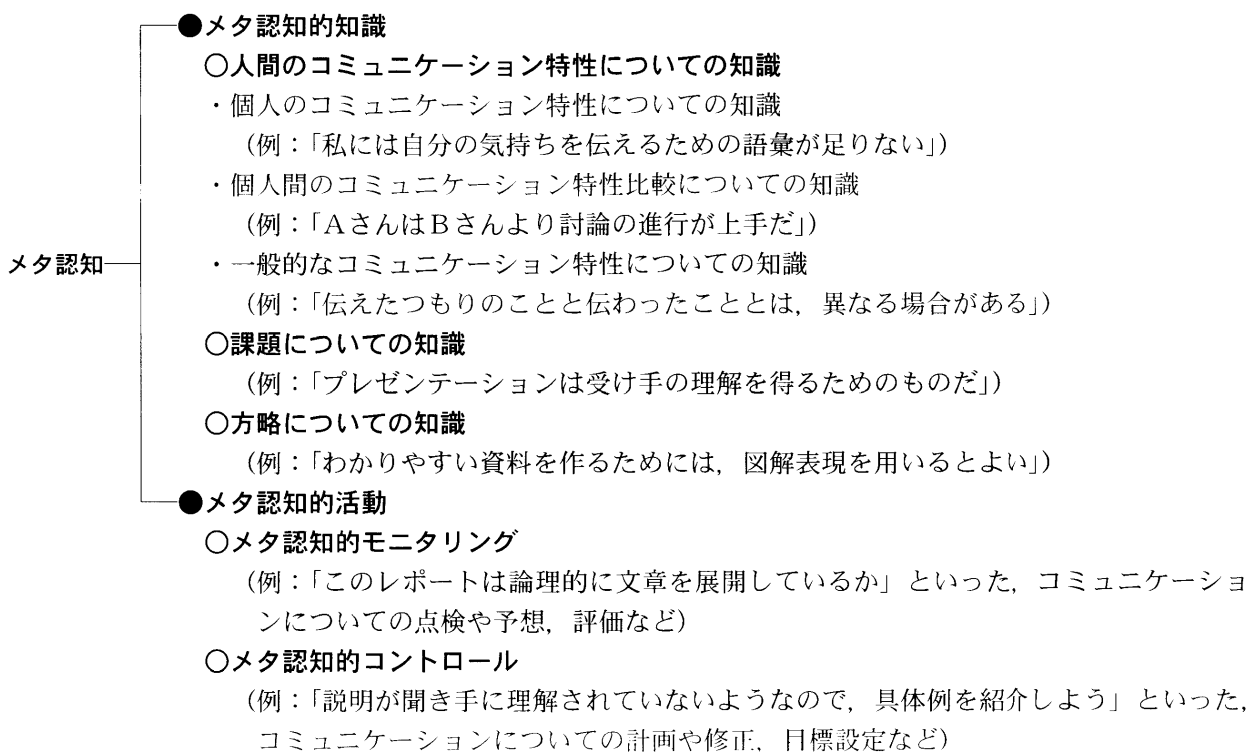


図1 コミュニケーションに対するメタ認知

ケーション能力が要求される。Sternberg は、「成功する知能」(successful intelligence) という語を好んで用いるが、まさしく社会での成功には、コミュニケーション能力は欠かせないものである。

また、Gardner (1999) の多重知能理論 (theory of multiple intelligence) においては、言語的知能が、話し言葉・書き言葉への感受性、言語を学ぶ能力、ある目標を達成するために言語を用いる能力というように広くとらえられており、これがコミュニケーション能力に該当すると考えられる。Gardner は、言語的知能を含めた7種類の知能分類を行っており、最後に追加した2種類の中に、対人的知能 (他者の動機づけや欲求を理解することによって、他者とうまくやっていく能力) が含まれることになった。この対人的知能も、コミュニケーション能力に関係すると考えられる。

さらに、Goleman (1995) は、知能を「感じる知能」と「考える知能」の2種類に分けてとらえ、感じる知能をもっと重視すべきであると主張した。自分自身や他者の感情に対する感受性を高め、自分に関しては感情の自己管理を行い、他者に対しては共感力 (他者の主観的経験を知覚する能力) を持って相手の感情を望ましい方向に向けることが大切であるという。Goleman が知能の感情的側面 (emotional intelligence) と呼ぶものの中には、自分の気持ちを言葉で表現する力や、他者が心情を吐露する言葉を理解する力が含まれる。これらは、コミュニケーション能力の重要な要素である。効果的なコミュニケーションを通して、感情や人間関係に関わる問題を解決する力は、生きていくために欠かせないものである。

このように、知能理論におけるコミュニケーション能力の位置づけは時代とともに変化し、抽象的な言語能力から、より広く感情や人間関係の調整にも関わる現実的・実際的な問題解決能力として定式化されるようになった。受け手の認知や感情に配慮した、すなわちメタ認知を働かせたコミュニケーション能力を重視する知能観が広まりつつあると言えよう。

4. コミュニケーション教育の内容をどう定めるべきか

4.1. 米国の教科書に見るコミュニケーション教育の内容

それでは、コミュニケーション能力を育てるための教育には、どのような内容を含めるべきか。これを考えるに当たって、参考までにコミュニケーション教育の先進国の1つである米国の例を見ておきたい。人種や民族の異なる人々から構成される米国では、相互理解や自己主張のためにコミュニケーション・スキルを獲得することは、まさに生きるために不可欠なものである。コミュニケーション教育には、当然のことながら力が注がれてき

た。ここでは、社会に出ていく前に習得させたい内容を豊富に盛り込んだ、大学生用の教科書を例に挙げ、その内容を紹介する。“Communicating” (Taylor, Meyer, Rosegrant, and Samples, 1992) は、初版 (1977年版) から版を重ねて第6版に当たる教科書である。きわめて広い領域をカバーしており、内容も多岐に渡る1冊である。この教科書で扱われている内容を、表2に挙げる。コミュニケーションの認知的側面を広くカバーしている点が、特徴的である。

表2 “Communicating” (Taylor, Meyer, Rosegrant, and Samples, 1992) の内容

-
1. プロセスとしてのコミュニケーション
 - ・コミュニケーション：プロセスとして見る
 - ・コミュニケーションの要素とプロセス
 - ・知覚は学習される
 2. コミュニケーションにおける自己概念
 - ・自己概念の性質
 - ・自己概念の発達
 - ・コミュニケーションと自己概念
 3. 意味を分かち合うための言語使用
 - ・意味の意味
 - ・言語を学び、知覚することを学ぶ
 - ・より効果的な言語使用
 - ・言語革命
 4. 非言語的手がかりの使用
 - ・いくつかの注意点
 - ・視覚に訴えるメッセージ伝達
 - ・聴覚に訴えるメッセージ伝達
 - ・触れること
 - ・他のチャンネルからのメッセージ伝達
 - ・非言語メッセージの使用
 5. 思考：コミュニケーションを上手に行うための鍵
 - ・記憶
 - ・推論
 - ・思考のエラー (推論エラー)
 - ・推論分析のための Toulmin モデル
 6. 上手に聴き、適切に応えること
 - ・聴く状況
 - ・効果的な聴き方：発言を理解する
 - ・効果的な聴き方：発言の理由を理解する
 - ・共感的な聴き方
 - ・評価するための聴き方
 7. 人と人との関係
 - ・関係はどのように発展するか
 - ・関係の維持
 - ・信頼

- ・個人差
- ・家族のコミュニケーション
- 8. 異文化間コミュニケーション
 - ・人種のるつぼという神話
 - ・違いを越えたコミュニケーション
 - ・言語的・非言語的な差異
 - ・サブカルチャー
 - ・ジェンダー
 - ・異文化間コミュニケーションの改善
- 9. 集団の中での意思決定
 - ・集団のプロセスに影響する要因
 - ・集団の目標を設定する
 - ・リーダーシップ
 - ・衝突をうまく処理する
- 10. 新しい職場でのコミュニケーション
 - ・新しい職場で機能する
 - ・異なる立場の人々と関わる
 - ・インタビュー
 - ・組織を理解する
 - ・自己主張のコミュニケーション
- 11. スピーチの準備：考えをまとめる
 - ・ゴールを設定する
 - ・考えをまとめる：主題
 - ・考えをまとめる：アウトライン
 - ・導入と結論を展開する
 - ・アウトラインの見本
- 12. スピーチの準備：アイデアを発展させる
 - ・サポート材料を使う
 - ・サポート材料のタイプ
 - ・サポート材料の出所と利点
- 13. パブリックスピーキング：声と体を使う
 - ・手引きとなる原理
 - ・会話スタイルを使う
 - ・非言語、非音声コミュニケーション
 - ・音声によるメッセージ伝達
 - ・スピーチ不安への対処
- 14. 説得
 - ・説得の性質
 - ・説得の目標設定
 - ・説得的議論を展開する
 - ・説得を体系化する
 - ・説得力（説得の信頼性）を高める
 - ・説得の取り組みを計画するためのチェックリスト
- 15. マスメディアへの対応
 - ・マスメディアに対応する
 - ・マスメディア
 - ・メディアの効果
 - ・マスコミュニケーションを考える

・広告

4.2. 鳴門教育大学における授業実践からの示唆

筆者は1987年から2002年の間、教育実習事前指導の授業科目（旧カリキュラムでは、実地教育Ⅴ「教育工学演習」／新カリキュラムでは、実地教育Ⅳ「コミュニケーション・教材開発演習」）の中で、コミュニケーションに関わるコースを担当し、メタ認知を促すことに重点を置いた授業を行ってきた。具体的な演習活動を通して、コミュニケーションについて考えさせることを原則とした。16年にわたる授業の中で扱ってきた主な内容は、表3の通りである。

表3 鳴門教育大学教育実習事前指導のコミュニケーション授業で筆者が扱ってきた主な内容

- ・自分のコミュニケーション特性を理解する
- ・自分のコミュニケーションの問題点を振り返る
- ・言語表現の誤解経験を振り返る
- ・コミュニケーションが対人認知に及ぼす影響を考える
- ・教師の発話意図を子どもが解釈する際に影響する要因を考える
- ・子どもに対する叱り方の影響を考える
- ・教師の冗長な談話に対する子どもの反応を理解する
- ・伝達段階での情報の歪みを理解する
- ・説明の方法を工夫する
- ・説得力を持つ意見の述べ方を考える
- ・あいづち、うなずきの発話・発想促進効果を理解する
- ・二人と三人の共同思考を比較し、違いを考える
- ・対面コミュニケーションとコンピュータを介したコミュニケーションを比較し、違いを考える
- ・手紙と携帯メールを比較し、違いを考える
- ・描画ソフトを活用して配付資料を作成する
- ・ビデオ作品作りを計画・実施・評価する
- ・討論を計画・実施・評価する
- ・プレゼンテーションを計画・実施・評価する

教育実習事前指導としてのコミュニケーション教育においては、教育実習生として子どもたちとどのようにコミュニケーションをとればよいか、また、子どもたちどうしのコミュニケーション活動をどう設計すればよいかを考えさせることが主な目的である。学生は、教師としての自分の発言を、自分とは年齢や生活経験の異なる子どもたちがどのように受け止めるのかを常に先回りして考える必要がある。すなわち、ものの見方や考え方が自分とは異なる相手を想定したコミュニケーション練習を行うことになる。日頃、同質性の高い友人とのコミュニ

ケーションに慣れている学生にとって、このように少し異質な他者を相手とする練習は、情報表現力を育てる上で有効である。

この授業において得られた気づきには以下のようなものがある。これらの気づきを生かしながら授業の見直しを行ってきた。

- ①学習者は自分についての関心が強く、自分のコミュニケーション活動の分析には意欲的に取り組む。彼らは自分のコミュニケーション・スキルについての問題意識を持っており、そうした彼らの問題を拾い上げる形で学習活動につなげることが効果的である。
- ②コミュニケーション授業においては、特にクラスの仲間（peer）の果たす役割が大きく、仲間のモデリング、仲間との相互評価が効果的である。
- ③コミュニケーションの行動的側面（よく響く声で堂々となめらかに話すなど）や感情的側面（自分の感情を表現している）には学習者の注意が向きやすいが、認知的側面（話の組み立てが論理的であるなど）には注意が向きにくい。この点に留意した指導が必要である。
- ④模範事例（よくできたスピーチなど）を示すだけでは十分ではなく、むしろ失敗事例の分析が必要である。失敗事例の分析から学ぶことは多い。コミュニケーションについての自己学習力を育てるには、事例から学ぶ力すなわち観察から一般法則を帰納する力が必要である。
- ⑤ただコミュニケーション活動を行うだけでは効果は薄く、自分の発言テープを文書化して検討させるなどの手段を援用しながら、コミュニケーションに対するメタ認知を促すことによって、活動から学ぶ力が育つ（三宮，1995；2004c）。
- ⑥「このような話し方をする方がよい」と、結論のみを提示して指導するのではなく、「本当にそうか」「なぜそうなのか（どのようなメカニズムが働くのか）」を学習者に考えさせ、理解させることが重要である。これは、コミュニケーションに対する科学的な態度と言い換えることもできる。こうした態度を育てることで、学習した内容が他の場面・状況にも転移しやすくなる。

5. コミュニケーション教育のための内容モジュールの提案

5.1. 大阪市立淀商業高校における試み

大阪市立淀商業高校（笠岡廣志校長）では、商業科・人間科学コースの生徒が選択できる科目として、今年度すなわち2004年度から「コミュニケーション」を新設した。2年生から始まり、3年生へと積み上げる。週2コマで2年間6学期分の授業を開発する必要がある。筆者はこの開発に関わっており、授業担当の安東裕二教諭とともに授業の計画を立てている。

現時点では、表4に示すような授業計画案を作成し、進めている。生徒の反応を見ながら、細部を改善していく予定である。

表4 淀商業高校における「コミュニケーション」の授業計画案

<p><目標></p> <p>社会生活に必要なコミュニケーションのための知識とスキルの習得を目指し、以下の2点を目標とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) コミュニケーションを通して他者との間で情報のやりとりを適切に行い、共同で問題解決を行う能力と態度を育てる。 2) コミュニケーションを通して、他者との良好な人間関係を築き、維持する能力と態度を育てる。 <p><指導計画></p> <p style="text-align: center;">2年生</p> <ol style="list-style-type: none"> 1学期) コミュニケーションの基礎を学び、人間一般や自分自身のコミュニケーション特性を理解する。 2学期) 事物やことがらを言語で的確に記述する方法、および目的や相手に応じた説明の方法を学ぶ。 3学期) 意見文の書き方およびスピーチの方法を学ぶ。 <p style="text-align: center;">3年生</p> <ol style="list-style-type: none"> 1学期) 情報メディアを活用したプレゼンテーションと討論の方法を学ぶ。 2学期) 人間関係を構築・維持・修復するためのコミュニケーションの方法を学ぶ。 3学期) コミュニケーションのリスクや落とし穴を理解し、それらに対処する方法を学ぶ。
--

5.2. コミュニケーション教育の内容モジュール

ここでは、淀商業高校の「コミュニケーション」授業を設計するにあたり、社会に出るまでに習得することが望ましいと考えられる内容を選定した。コミュニケーションの基礎知識とスキルをモジュール化し、1つの目安として提出する(表4)。他校においてより限定された時間の中で扱う場合には、学習者の既習事項を考慮した上で、必要度の高いモジュールを優先的に選び出すことも可能である。

表4 コミュニケーション教育の対象とする基礎知識とスキル（試案）

- 人間の情報処理についての基礎知識
 - ・記憶の危うさを理解する
 - ・思いこみの影響を理解する

- ・感情の影響を理解する
- ・社会的圧力の影響を理解する
- ・人間の情報処理の弱点（誤解、記憶違い、勘違い）を補う方略を理解する
- コミュニケーションの機能についての基礎知識
 - ・コミュニケーションが思考に及ぼす影響を理解する
 - ・コミュニケーションが感情に及ぼす影響を理解する
 - ・コミュニケーションが人間関係に及ぼす影響を理解する
 - ・非言語的コミュニケーションの機能を理解する
- コミュニケーション・メディアの特性についての基礎知識
 - ・対面コミュニケーションの特性を理解する
 - ・電話コミュニケーションの特性を理解する
 - ・メール・コミュニケーションの特性を理解する
 - ・各メディアの長所を生かし短所を補うための方略を理解する
 - ・各メディアを用いる際のマナーを理解する
- ベーシック・スキル
 - ・目的に応じた言語表現ができる（語彙、文法など）
 - ・目的に応じた非言語表現ができる（視線、表情、動作、パラ言語など）
 - ・わかりやすく話を組み立てることができる
 - ・論理的に話を組み立てることができる
 - ・受け手の既有知識、理解力や状況に応じて話を組み立てることができる
 - ・時間制限や状況に応じて話を組み立てることができる
 - ・適切な自己主張ができる
 - ・共感的に他者の発言を受け止めることができる
 - ・他者の反応（言語反応、非言語反応）を敏感に察知することができる
 - ・他者の考え方・感じ方を推察することができる（他者の視点に立つことができる）
- 説明スキル
 - ・要点を明確に伝えることができる
 - ・制限時間（制限文字数）に応じて長さを伸縮することができる
 - ・受け手の状態（既有知識、理解力など）に応じて説明の仕方を変えることができる
 - ・受け手の既有知識につなげる形で説明することができる
 - ・受け手の理解を促進する具体例を用いることができる
 - ・受け手の理解を促進する補助ツール（概念図やイラストなど）を用いることができる
- スピーチ・スキル
 - ・問題を提起し、論を展開し、結論を導くことができる
 - ・根拠に基づいて論を展開することができる
 - ・論の根拠をサポートする具体的な証拠や例を挙げるこ
- とができる
- ・反論を想定し、再反論することができる
- ・論理的に内容を構成することができる
- ・受け手に理解しやすいように内容を構成することができる
- ・受け手の関心を引くように内容を構成することができる
- ・決められた持ち時間に応じてスピーチを組み立てることができる
- ・スピーチの際に言語的・非言語的情報を活用することができる
- レポート（論文）作成スキル
 - ・正しい書きことばが使える（文法、語彙、表現など）
 - ・公共性を意識した文章表現ができる
 - ・問題を提起し、論を展開し、結論を導くことができる
 - ・論理的に論を展開することができる
 - ・根拠に基づいて論を展開することができる
 - ・論の根拠をサポートする具体的な証拠を挙げることができる
 - ・反論を想定し、再反論することができる
 - ・要点を抽出し、要約を作成することができる
- コミュニケーション・メディア活用スキル
 - ・目的に応じて適切なメディアを選ぶことができる
 - ・各メディアの長所を最大限に生かすことができる
 - ・各メディアの短所を補う工夫をすることができる
 - ・各メディアを適切に組み合わせ用いることができる
- 討論（共同思考）スキル
 - ・他者の発言を正しく理解することができる
 - ・根拠を明示して意見を述べるすることができる
 - ・討論の主題に関連づけて発言することができる
 - ・討論の目的（拡散か収束かなど）を意識して発言することができる
 - ・他者の発言を効果的に引用して発言することができる
 - ・他者の発言に適切な質問や意見を出すことができる
 - ・タイミングよく（文脈に沿って）発言することができる
 - ・他者からの質問や意見に対して適切に対応することができる
 - ・発話交代を適切に行うことができる
 - ・討論の進行役をつとめることができる
- プレゼンテーション（プレゼン）・スキル
 - ・プレゼンテーション・ソフトを活用することができる
 - ・論理的に内容を構成することができる
 - ・受け手に理解しやすいように内容を構成することができる
 - ・受け手の関心を引くように内容を構成することができる
 - ・プレゼンの際に言語的・非言語的情報を活用すること

ができる

- ・決められた持ち時間に応じてプレゼンを組み立てることができる

○画像活用スキル

- ・文書の内容を補う簡単なイラスト（挿絵や説明図）を手がきすることができる
- ・イラスト集等から目的に応じたイラストを選び出すことができる
- ・イラストを効果的にレイアウトすることができる
- ・デジタルの静止画や動画を撮影することができる
- ・デジタルの静止画や動画を編集することができる
- ・デジタルの静止画や動画を効果的に活用することができる

○資料作成スキル

- ・課せられた様式に合わせて自在に文書を変形することができる
- ・図（チャートやダイアグラム）や表を作成することができる
- ・数値情報を適切に表やグラフで表すことができる
- ・見やすく情報をレイアウトすることができる
- ・文字のフォントやサイズを目的に応じて選択することができる

○人間関係調整スキル

- ・コミュニケーション・トラブルの発生を予想することができる
- ・コミュニケーション・トラブルの予兆に気づくことができる
- ・コミュニケーション・トラブルを解決することができる
- ・適切な主張・反論・要求・拒否・弁明・謝罪ができる
- ・適切な自己開示ができる

6. おわりに

日本が現在解決すべきコミュニケーションの問題は、自分の考えや気持ちをうまく伝えることができないことである。本稿では、この問題について論じ、コミュニケーションに際しての私たちの心の働きについての理解、すなわちメタ認知を基礎として情報表現力を育てるコミュニケーション教育の必要性とその理論的背景を述べた。また、淀商業高校でのコミュニケーション授業の試みを紹介し、コミュニケーション教育で扱う内容モジュールの試案を提出した。

事例として紹介した淀商業高校における試みを1つのモデルケースとして、コミュニケーション教育のカリキュラム開発を行っていきたい。一般の普通科高校では、このような独立科目を設けることが困難かもしれないが、

たとえば総合的な学習の時間などを活用した取り組みは十分可能である。コミュニケーションという観点から個別教科を補い、関連づけるためにも、総合学習に位置づけることは一考に値するだろう。

すでに部分的には、国語や英語、情報などの教科でコミュニケーションを学んでいるとは言え、学習者がこれを総合的にとらえ、1つの体系を自力で描き出すことは困難であろう。そうであるならば、指針となる体系が必要である。コミュニケーション教育の体系作りの作業は、緊急課題と言えよう。

引用文献

Dance, F. & Larson, C. (1976) *Human Communication: A Theoretical Approach*, New York: Holt, Rinehart, & Winston.

藤原伸彦・三宮真智子 (2003) 学習者のパーソナリティ特性によるコミュニケーション・メディア選好の差異 日本システム情報学会誌, 20, 95-104.

Gardner, H. (1999) *Intelligence Reframed: Multiple Intelligence for the 21st Century*. New York: Simon & Schuster.

Goleman, D. (1995) *Emotional Intelligence: Why it can matter more than IQ*. New York: Brockman 土屋京子 (訳) 1996 EQ: こころの知能指数 講談社

Hall, E. (1966) *The Hidden Dimension*, New York: Doubleday.

久米昭元 (1993) コミュニケーション研究の主な領域 日本コミュニケーション学会 橋本満弘・石井敏 (編著) 「コミュニケーション論入門」, 桐原書店, 第2章, 25-53.

水谷信子 (1988) あいづち論 日本語学, 7, 4-11.

文部科学省 (1999) 高等学校学習指導要領

http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301d.htm

岡部朗一 (1987) コミュニケーションの基礎概念 古田 暁 (監修) 石井敏・岡部朗一・久米昭元 (著) 「異文化コミュニケーション」, 有斐閣, 第1章, 15-38.

三宮真智子 (1995) メタ認知を促すコミュニケーション演習の試み「討論編」: 教育実習事前指導としての教育工学演習から 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要, 9, 53-61.

三宮真智子 (1996) 思考におけるメタ認知と注意 認知心理学4 思考(市川伸一編著), 東京大学出版会, 7章, 157-180.

三宮真智子 (1997) 認知心理学からの学習論: 自己学習力を支えるメタ認知 鳴門教育大学研究紀要教育科学編, 12, 1-8.

Sannomiya, M., & Kawaguchi, A. (1999) *Cognitive*

- characteristics of face-to-face and computer-mediated communication in group discussion: An examination from three dimensions. *Educational Technology Research*, 22, 19-25.
- Sannomiya, M., & Kawaguchi, A. (2000) A case study on support for students' thinking through computer-mediated communication. *Psychological Reports*, 87, 295-303.
- 三宮真智子 (2004a) コプレズンス状況における発想支援方略としてのあいづちの効果：思考課題との関連性
人間環境学研究, 2, 1, 23-30.
- 三宮真智子 (2004b) 子どものコミュニケーションを考える：現状と課題 児童心理7月号, 金子書房, 10-15.
- 三宮真智子 (2004c) コミュニケーション力を育てるメタ認知 教職研修10月号増刊, 教育開発研究所, 38-43.
- Sternberg, R. J. (1996) *Successful Intelligence: How practical and creative intelligence determine success in life*. New York: Simon & Schuster. 小此木啓吾・遠藤美恵 (訳) 1998 知能革命 潮出版
- Taylor, A., Meyer, A. C., Rosegrant, T., and Samples, B. T. (1992) *Communicating*, New Jersey, Prentice Hall.
- Thurstone, L.L. (1938) *Primary mental abilities*. Chicago: University of Chicago Press.